

一枚の写真から

——帰国前の陶晶孫、陶晶孫と人形劇のことなど

小 谷 一 郎

まず一枚の写真からご覧いただきたい⁽¹⁾。右から背広を着ているのが成仿吾、その左手が李白華、手前で頬杖をついているのが陶晶孫、隣の和服を着ているのが王道源、学生服姿で立っているのが馮乃超である。この写真が撮影された時期について「解説」には単に「1927年撮影」としかないが、1927年の8月から10月の間と特定できる。手がかりは右端にいる成仿吾で、彼は、四・一二クーデターの勃発によって国民革命が挫折した状況の中で、創造社が「方向転換」し、「無産階級革命文学」を提唱することを主張していた日本留学生李初梨、馮乃超等の帰国を促すため、27年の8月中旬に来日した⁽²⁾。李初梨、馮乃超等、第三期創造社の人々は、その要請を受けて、27年10月までに帰国する⁽³⁾。以上のことから、この写真が撮影されたのは、27年8月中旬から10月までの間、場所は東京、しかも成仿吾が来日してまだ間もない時ではないかと推測される。



③在東京与成仿吾等合影（1927年頃）自左起：
馮乃超、王道源、陶晶孫、李白華、成仿吾

この写真が持つ面白さを語るには、まずここにいる馮乃超について触れておかなければならない。

四・一二クーデターの勃発は、中国人日本留学生の間にも大きな「亀裂」を生じさせた。国民党駐日総支部は分裂し、蔣介石を支持する「右派」と、それを支持しない「左派」とに分かれた。馮乃超は、当時東京帝大文学部社会学科の学生で、26年初め頃は仏文にいた穆木天と「純粹詩歌」を志向していたが、その後急速に左傾化し、中国人日本留学生によって組織された「社会科学研究会」に参加する。社会科学研究会は、27年8月中国共産党日本特別支部の鄭漢先、童長英等によって組織され、「日本語が良くでき、日本語でマルクス・レーニン主義の文献が読める」甲組と、「日本に来たばかりで、日本語のできない」乙組とに分かれていた。馮乃超はこの「甲組」に所属していた。このように、馮乃超は、その時、留学生内部にあった社会科学研究会で活動し、日本のプロレタリア文学運動とも関係があった⁽⁴⁾。

この写真の面白さは、そうした馮乃超、それを迎えに来た成仿吾に加え、陶晶孫、王道源と一緒に写っていることである。陶晶孫は第一期からの創造社同人で、日本の新感覚派の影響を受け、27年10月上海創造社出版部から小説集『音楽会小曲』を出版している。王道源は26年4月に東京美術学校西洋画科（藤島武二研究室）を卒業、同研究室の研究生となり、日本人女性と結婚し、根津神社近くに住んで「東京美術研究会」（のちの「青年芸術家連盟」）を主宰していた⁽⁵⁾。その陶晶孫と王道源が成仿吾、馮乃超と共にここにいる。ということは、陶晶孫、王道源の二人もまた成仿吾が来日した意味を知っていた。つまり、この二人もまた創造社の「方向転換」を容認、ないしは支持していた。さらにいうと、陶晶孫、王道源もまた当時の日本プロレタリア文学運動と何らかの関わりを持っていた可能性があることになる。この写真はそうしたことを我々に示唆してくれているのである。

紙幅の関係から、小論では陶晶孫だけを取り上げることにする。

陶晶孫は、1897年12月26日江蘇省無錫の代々医者を営む家に生まれた。1906年、9才の時に両親、姉慰孫と共に来日。錦華小学校、府立一中、一高を経て19年九州帝国大学医学部に入学、同じ九州帝大の学生だった郭沫若と知り合い、創造社に参加した。陶晶孫はまたそこで郭沫若の二人目の奥さん佐藤とみの妹みさと出会い、23年東北帝大理学部物理学教室に進学後、24年に仙台で結婚した。その彼が、再び東京に出てくるのは26年のことである。陶晶孫

は、26年9月11日付で東京泉橋慈善病院、現在の三井記念病院の医員となり、同20日付で東京帝大医学部付属病院の副手をも兼務する⁽⁶⁾。小説集『音楽会小曲』は、27年までの陶晶孫の作品をまとめたものである。

陶晶孫に関する問題点の一つは、帰国後の陶晶孫をめぐってであろう。陶晶孫は、29年3月上海の東南医学院教授として招聘され、日本から帰国。その後、郁達夫から雑誌〈大衆文芸〉の編集を受け継いだ。〈大衆文芸〉は、郁達夫・夏菜蒂編の時代（第1巻第1期～第6期 28年9月～29年2月）には、魯迅の協力を得ながら海外の優れた作品の紹介、翻訳に努めてきた。だが、29年11月陶晶孫編に代わった後の〈大衆文芸〉第2巻は面目を一新する。第2巻第1期では陶晶孫の手になる「木人戯」（人形劇）、村山知義の作品等が翻訳、紹介され、第3期、第4期では「新興文学専号」が生まれ、林守仁「一九三〇年日本新興劇団往何処?」、白川次郎「日本左翼文壇之一瞥」などが掲載される。「白川次郎」は朝日新聞の特派員で、のちに「ゾルゲ事件」で逮捕、処刑された尾崎秀実、「林守仁」は山上正義の別名である⁽⁷⁾。陶晶孫はまた、29年10月に結成された上海芸術劇社に参加、第二回公演のために、村山知義がアレンジした戯曲「西部戦線異常なし」（原作は江馬修）をさらに中国風に直すなど、多くの脚本を翻訳すると共に、「木人戯社」を組織、人形劇の公演を試みた。陶晶孫の生涯の中で「もっとも活発な文学活動をおこなった」⁽⁸⁾といわれるのがこの時期である。だが、陶晶孫に、この時どうしてそうした活動が可能だったのか、その「前史」に関する部分のことは、資料的な制約もあっていまもってよくわかっていない。私の中にいまそれに関する十分な材料があるわけでもない。それでも、小論をまとめてみようと思ったのは、陶晶孫研究が陶晶孫生誕百年などを機にある成果をみながらも、この時期が不明なままであるのを考えてみた時、現時点でわかっていること、予想されることなどを整理してみるのもそれなりに意味があることではないかと思ったからである⁽⁹⁾。小論は、このように帰国前の陶晶孫、陶晶孫と人形劇のことなどについて調べ得たかぎりをまとめたものである。

（一）

さて、まず、肝心の日本留学時代における陶晶孫と尾崎秀実、山上正義との関係についてだが、これについて新しい材料は何もなく、言えるのは、陶晶孫と尾崎秀実とを繋いだのが陶晶孫の弟陶烈であるということだけでしかない。そしてこれとても大方が予測していたことをあらためて確認しているにすぎないことをお断りしておきたい⁽¹⁰⁾。

陶烈は陶晶孫のすぐ下の弟で、1900年の生まれ。陶晶孫たちが来日した翌年の1907年に日本に留学。精華小学校から陶晶孫と同じように府立一中、一高を経て19年京都帝大医学部に入学し、卒業後、一時京都帝大生理学教室に在籍していたが、25年10月東京帝大精神病学教室に入り、同年7月から青森県浅虫にあった東北帝大臨海実験所で研究をはじめ。陶烈は、その後毎年夏場には浅虫の臨界実験所に通っている。彼は優れた脳研究、神経学の研究者として将来を囑望されていたが、30年6月広東中山大学教授として招聘され帰国、再来日した折、扁桃腺炎で手術を受け、後にそれが悪化して蜂窩組織炎となり30年8月21日横浜の病院で亡くなった。その時、陶烈の遺骨を日本から中国に持ち帰ったのが、折しも上海から東京に来ていた尾崎秀実である⁽¹¹⁾。

陶烈と尾崎秀実の間を繋いだのは柘植秀臣である。柘植秀臣の父秀磨は、明治元年岐阜県に生まれ、小学校を出てから百姓、炭焼き、村役場の事務などをしてきたが、明治24年、1891年の濃尾大地震後、医者になる決意をし単身上京、柘植の回想によると「車夫や印刷工などを七ヶ月ほどやった後、同郷の関係で知り合った尾崎秀真氏（尾崎秀実の父）の手引きで本所の近藤玄齡先生の医院の書生となった。秀真氏はわたしの父より大分若かったが、それくらい尾崎家とわたしの一家とは親戚以上の交際がつづいているので、尾崎秀実がゾルゲ事件で刑死したとき、父はわが児を失ったように悲しんだ間柄だった」⁽¹²⁾。

尾崎秀実は、明治34年、1901年に芝区伊皿子町に生まれた。尾崎の父秀真は、秀実の誕生を待たずして〈台湾日日新報〉の記者に招かれ、秀実は同年10月母きたと共に台湾に渡り、一高に入学するまでほぼ18年間を植民地台湾で過ごした。尾崎は19年一高を受験するため上京、「親戚以上の交際」があった柘植の家に身を寄せる。彼は、柘植の家で「ほっつあん」という愛称で呼ばれ、皆から親しまれていた⁽¹³⁾。

柘植秀臣は、北大予科に入学、さらに東北帝大に進む。北大予科では医学進学だった彼が東北帝大で生物学を学び、脳研究に移った背景には尾崎の影響があり、彼に「脳研究の目を開いてくれ」「自然弁証法の研究をともにした」のが陶烈だった⁽¹⁴⁾。

柘植と陶烈が出会ったのは、26年の夏のことである。柘植はこう言う。「かれ（陶烈——小谷）が大正15年の夏休みまえ、東北大学の浅虫臨海実験所でナマコの筋肉の実験の準備をするために仙台に立寄ったとき、今井丈夫君の紹介ではじめてかれに会った。そして、その夏は浅虫で一夏をいっしょに過ごした。それくらい、かれが仙台を訪れると毎日のように会い、またわたしが東京

へでたときは毎日かならず会うという深い交友を結ぶようになった」「烈との交友は、(中略) 脳の研究、中国の問題、唯物論の研究などを通じて互に別れる日までつづいた」⁽¹⁵⁾。

こうした仲にあって、柘植が陶烈に尾崎のことを話すのは時間の問題だと言っていい。

尾崎秀実は、東大を卒業すると大学院に残り、社会科学の研究をしていたが、26年5月東京朝日新聞社会部に入り、27年10月に大阪朝日の支那部に移った。台湾で暮らしもともと中国問題に関心を寄せていた尾崎が、中国行きを考えはじめたのは、朝日に入社してまもない頃、ウィットフォーゲルの『目覚めつつある支那』を読んでからだという。彼が、念願かなって朝日新聞の特派員として上海に派遣されるのは、28年11月のことである⁽¹⁶⁾。

柘植は、尾崎秀実を「中国問題の研究者」として日本時代の陶烈に紹介した。柘植はこう記している。「1930年8月、烈氏が日本滞在中に急死したという悲しい通知をわたしはアメリカで受け取った。異郷でこの悲報を受けたが、どうにもならなかった。しかし、幸いにも、わたしはかつて、中国問題の研究者として尾崎秀実を烈氏に紹介してあったので、烈氏をつうじて陶さんと尾崎は上海で交友を結んでいた」⁽¹⁷⁾。

柘植はまた、陶晶孫とも往来があった。柘植と陶晶孫の出会いについては、柘植の記憶の中に異同があり⁽¹⁸⁾、その時期を必ずしも特定できないが、27年にはすでに陶烈を通じて面識があった。柘植はこう言う。「そのころわたしは仙台にいたが、ちょうど東京から仙台にきて論文の整理をしていた陶さんの令弟烈氏が泊まっていた片平丁の近くの下宿の一室で、かれとわたしが1927年の蒋介石による上海の学生と労働者の弾圧事件のことを憤慨しながら話していたところに、陶さんがひょっこり入ってきたように記憶する。まえから陶さんはまじめなクリスチャンだということは聞いていたが、はじめて会った陶さんはわたしにはおとなしい人道主義者として強く印象づけられた」「令弟烈氏とわたしの交友は、かれがわたしの脳研究の先輩格というだけでなく、唯物論や、社会科学にかんするわたしたちの関心によって強く結ばれていたもので、かれが『兄貴はクリスチャンだからあまりそんな議論をしても無駄だよ』、という言葉を守って、その当時は陶さんとは深く話あったことがなかった」⁽¹⁹⁾。

このように、陶晶孫と尾崎を繋いだのは弟陶烈である。陶晶孫と尾崎秀実、この二人は26年9月から27年10月までの間、共に東京にいた。同じ時、陶烈も東京にいた。先にみたように、柘植は上京した時、陶烈と「毎日かならず会う

という深い交友」を結んでいた。そうした状況の下で、いつ柘植が陶烈に尾崎を紹介し、また、陶晶孫がいつどんなかたちで陶烈から尾崎のことを知ったのか、いまそれを確定する材料はないものの、尾崎と陶晶孫の關係に陶烈と柘植が介在していたことは間違いなく、陶晶孫と尾崎が、陶晶孫の日本留学時代から面識があった可能性は高いと思われる。

(二)

帰国前の陶晶孫で注目すべきことは、彼が小説集『音楽会小曲集』をまとめているだけでなく、その時、村山知義の人形劇「やっぱり奴隷だ」を訳していることであろう。村山知義の「やっぱり奴隷だ」は、「スカートをはいたネロ」(〈演劇新潮〉27年4月)に続く2作目の人形劇脚本で、陶晶孫訳、村山知義「畢竟是奴隷罷了」は、27年9月16日発行の〈洪水〉第3巻第34期、11月1日発行の同第35期に掲載された。これが示すように、陶晶孫の人形劇は日本から持ち込まれたものである。だが、これまでの研究では、五四以降の福建、台湾、上海での人形劇の普及と歴史に触れた後、それが「上海の何人かの文化人の注意を引いた」として陶晶孫の名をあげているものの、日本経由であることは指摘されていない⁽²⁰⁾。

村山知義は、「二・七惨案」に取材した29年6月の「暴力団記(「全線」)」の上演をはじめ、「最初のヨーロッパの旗」(8月)、「勝利の記録」(31年3月)、「東洋車両工場」(5月)の作者として、中国人日本留学生の間ではよく知られていた。時の中国人留学生の間で村山知義がいかに注目されていたかは、「東京左連」の「前史」との關係で私自身も他のところで触れたことがある⁽²¹⁾。だが、陶晶孫が村山知義の「やっぱり奴隷だ」を翻訳したのは、それよりも2年も早い。私の知るかぎり、陶晶孫訳「やっぱり奴隷だ」は、村山知義の作品が中国で翻訳された最初だと思う。とすれば、これは日中近代文学の交流という意味でも、注目されてしかるべき事柄であろう。

村山知義の「やっぱり奴隷だ」は〈文芸戦線〉の27年7月号に掲載された。時期的にみて、陶晶孫はこの〈文芸戦線〉7月号を底本にして訳したと考えられる。ということは、陶晶孫はその時〈文芸戦線〉を目にしていたことになる。だが、陶晶孫と〈文芸戦線〉、村山知義との直接的な關係は、いまのところは確認できていない。

陶晶孫と村山知義を結びつけたのは鈴木彦次郎であろう。中西康代の「陶晶孫初期作品集『音楽会小曲』と新感覚派に関する一考察」(東京女子大学〈日本文学〉第83号 95年3月)によれば、陶晶孫『音楽会小曲』の諸作品は日本の

新感覚派、〈文芸時代〉の影響を受けたもので、中でも同人鈴木彦次郎の作品に触発されているという。中西は、『音楽会小曲』に収められている作品と鈴木彦次郎の作品とを比較しながら、相互の作品世界の連関を具体的に指摘している。その上で、中西は、『音楽会小曲』所収の「Café Pipeau的広告」が村山の「或る戦」(〈文芸時代〉25年9月)を思わせるところがあるとも述べている。このように、陶晶孫は鈴木彦次郎、〈文芸時代〉との関わりから、村山知義その人の存在は早くから知っていたと考えられる。

では、この時期なぜ陶晶孫は人形劇に関心を持ったのであろうか。おそらく、そこには村山知義が人形劇に注目したと同じ、当時の日本の次のような状況が関係しているであろう。村山知義は、自らが人形劇に関心を抱いた経緯を、「人形芝居は伊藤薫朔、千田是也の兄弟がウィットフォーゲルの『誰が一番馬鹿だ?』を糸あやつりで上演してセンセーションを起こしたのに端を発して、手軽にやれるところから、指使いが左翼演劇でも手を着けられ始めていた。私は四つ五つのころに、浅草の花屋敷で見た『ダークの糸あやつり』以来、だいすきだったのだ」と語っている⁽²²⁾。ここに見える人形芝居の公演とは、人形座第一回公演のことをいう。人形座第一回公演は、26年9月24日から26日まで築地小劇場で行われ、「すばらしい人形を操って、ウィットフォーゲルの『誰が一番馬鹿だ』を上演して、見事な成果を挙げ」、「客席を興奮させた」⁽²³⁾。人形座のメンバーは、東京美術学校在学中から土方与志が自宅の地下室に作った「土方模型舞台研究所」で舞台装置を勉強した伊藤薫朔、千田是也、伊藤智子、河田煦、野崎達夫、藤田巖、小山内薫、辻恒彦等である。上演されたウィットフォーゲル『誰が一番馬鹿だ』を翻訳、脚色したのは辻恒彦(この辻恒彦についてはのちにあらためて触れる)。陶晶孫は、先にも述べたように、帰国後、「木人戯社」を組織し、オットー・ミュラーの「荷車」、ハイドンの「子供協奏曲」、村山知義「やっぱり奴隷だ」の上演を企画している⁽²⁴⁾。この「木人戯社」という命名自体、「人形座」を思わせよう。

村山知義は「やっぱり奴隷だ」の冒頭で人形劇の特徴を、「これは手に嵌めて使う人形劇の脚本である。この技法はごく簡単で費用もかからない。我々の当然着目しなければならない形式である」と書いている。村山はまた、「やっぱり奴隷だ」を日本で最初の「反戦劇」であると位置付けている⁽²⁵⁾。そして陶晶孫は、「木人戯の紹介」(後出)の中で、人形劇がもつ意味をこう記している。「資本主義の発達と人形劇の衰退は平行している。現在人形劇は通りの小さな露天の劇場でその命を保っているだけかもしれない。だがいま文芸が革命

的意義を持つようになって、その独特の用法が確立した。その用法とは何か。それは人形劇の風刺的意義であり、その経済的な理由である。これによって新興人形劇が誕生したのである^{〔26〕}。このように、陶晶孫が人形劇に見たものも、人形劇の風刺性と経済性、速射的效果にあったわけで、こうした人形劇に対する位置付けは、村山知義の「やっぱり奴隷だ」などに触発されたものであろう。

陶晶孫は、この後さらに日本で人形劇「勘太与熊治」を書き、〈創造月刊〉第2巻第1期（28年8月）に発表した。「勘太与熊治」は六幕もので、第一幕「勘太家裏（左）」は農業を営む勘太と熊治に再び徴兵の知らせがくる、第二幕「船中（中）」は戦線に赴く二人の船中での会話で、第三幕「娼家門前（左）」はそれから2年後二人が中国の「大都会」で娼婦を買うために中国人から金を巻き上げる、第四幕「咖啡店（中）」は二人が他の日本兵とカフェーに入り、女給に悪戯しようとして民衆ともみ合いになった時、熊治が中国人学生を銃で撃ち殺したのを「日本軍官」がもみ消す、第五幕「船中（中）——勘太家裏（左）」は二人が日本に戻る時の船中で、第六幕「東京勘太家（中和左）」はその後工場労働者になった勘太が集会を開いているのを、巡査になった熊治が中止させたが、改心し、二人とも検挙されるという筋立てになっている。劇中、「中」「左」の指示があるのは、原作で陶晶孫が、「舞台中央に一小舞台」「舞台左手に一小舞台」を設けるよう図を書いて指示しているからで、たとえば、第五幕「船中（中）——勘太家裏（左）」では、帰国後どうしようかという二人の会話と平行して、働き手を失った勘太の家の「惨状」が演じられる。この「勘太与熊治」は明らかに「反戦劇」で、村山知義の「やっぱり奴隷だ」の線を踏襲したものである。その上で、ここで彼が人形劇の舞台構成まで指示しているという事実は、陶晶孫が日本で実際に人形劇を観ていたのではないかということ想像させる。さらに、この劇の明確な「傾向性」とその「テンポ」は、陶晶孫のそれまでの作品、そしてその後の作品と必ずしも合致しない。ということは、この作品にも下敷きがあるのではないかという気もするのだが、いまそれを裏打ちするだけの材料はない。

（三）

陶晶孫は、帰国後、〈大衆文芸〉第2巻第3期「新興文学専号・上冊」（30年3月）に「木人戯」欄を設け、「木人戯の紹介」、「木人戯の歴史」、「木人戯の技巧」、人形劇脚本「傻子的治療」を発表し、「各国新興文学」欄で「誰が一番馬鹿だ」を翻訳した。陶晶孫の「木人戯的紹介」、「木人戯の歴史」、「木人戯的

技巧」のうち、オリジナルなものは「木人戯的介绍」だけで、他の二編はすべて「節訳辻恒彦」となっている。問題はこれが何に依ったかであろう。陶晶孫が依ったのは、社会文芸叢書第五種、辻恒彦訳、ウィットフォーゲル『誰が一番馬鹿だ』（金星堂 27年3月10日）である。この「誰がいちばん馬鹿だ」が人形座第一回公演で上演されたことはすでに述べた通りである。辻恒彦は、村山知義と同じ前衛座の同人で、25年12月に結成された「日本プロレタリア文芸連盟」（この機関誌が〈文芸戦線〉）の一員だったが、福本イズムに批判的な人々が27年6月10日「日本プロレタリア文芸連盟」を脱退、「労農芸術家連盟」を組織した時、村山と共に「労芸」に移る。私はこの社会文芸叢書第五種、辻恒彦訳、ウィットフォーゲル『誰が一番馬鹿だ』を、元和光大学教授祖父江昭二先生からお借りした。本文中ではあるが、祖父江先生には心からお礼申し上げたい。

辻恒彦のこの本には、巻末に辻恒彦の手になる「人形劇について（覚書）」、「I 人形劇の種類」、「II 人形劇の歴史」、「III 一般的な注意一束」という短い人形劇の紹介文がついている。陶晶孫の「木人戯の歴史」、「木人戯の技巧」は、この「II 人形劇の歴史」、「III 一般的な注意一束」に依ったものである。一例をあげると、辻恒彦「II 人形劇の歴史」の冒頭部、「例へば、操人形について其の発生地および時期とか、それが欧州への移入に関して古代の放浪民族が如何なる役割を演じたか等をサンスクリットやヘブライの古典について検べることは、我々にとって可成り縁遠いことである。事実、我々の演じようとする人形劇はいろんな要素をいろんな系統から引いてゐる。それがイタリーからの直系であらうと、ジャバの影絵芝居に暗示を得たものであらうと、そんなことは一行お構ひなした。若しボツチの作品はその時代的考証に基いて演らねばならないとすれば、我々は告げる、親愛なるボツチ君よ、さよなら」という部分は、陶晶孫「木人戯の歴史」において、「叫我們到希百来的古典裏去找木人戯の発生或者発生時期，和木人戯移入欧州時的古代放浪民族所演的遺業，那是同我們現在的情形過分的遠了。事實上我們將演的木人戯裏面含有許多系統所来的要素。管他是意大利来的直系，是爪哇来的陰影戲借来的暗示，那許多都不去管他。假使你說潑替的作品要根本他的時代的考証而演，那麼我們要說了，“潑替君，再會”了」と置き換えられている。このように、陶晶孫の一文が社会文芸叢書第五種所収の辻恒彦の文章に依ったことは間違いない。

では、その上で、〈大衆文芸〉の陶晶孫訳「誰が一番馬鹿だ」が、当の辻恒彦訳に依るものかということ、じつは違うのである。私もはじめはそうだと思い

込んでいたのだが、祖父江先生からお借りした本を見てはじめて知った。該書の辻恒彦訳は、人形座公演用に修正を加えたもので、原作では「五幕七場」「序幕、第一場 どうして猫が鯉節番となつたか、第二場 一番ひどい層が高く泊まってゐる」、「第一幕 蝶々狩りと其の出来事」、「第二幕 ほんとうの喰人種に交つて」、「第三幕 腹切」、「第四幕 最後に笑ふものが、いちばんよく笑ふ」となっているのを、序幕を全部削り、第一幕から始め、第二幕第三幕を第二幕の第一場、第二場、第四幕を第三幕とした「三幕四場」の劇になっている。これに対し、陶晶孫訳は、序幕から「誰が一番馬鹿だ」を翻訳しており、原文から訳した可能性が高い。ウィットフォーゲルといえば、尾崎秀実に中国行きを決意させたのがウィットフォーゲル『目覚めつつある支那』だった。帰国後の陶晶孫と尾崎との関係を考えると、あるいは材料は尾崎が提供したのではないかと思つてみたりもするが、それもいまのところ想像だけでしかない。

(四)

陶晶孫は、30年8月1日、上海現代書局から木人戯集『傻子的治療』を出した。収録されている作品は、鄭伯奇「武器的木人戯」、陶晶孫訳「木人戯的紹介」「木人戯的歴史」「木人戯的技巧」「仮面」、陶晶孫「勘太与熊治」、「羊的素描」、陶晶孫訳「傻子的治療」、「畢竟是奴隸罷了」、「動物革命」、「梅資維来姆」、「誰是蠢」である。一見してわかるように、『傻子的治療』はこの時期の陶晶孫の人形劇に関する仕事をまとめたものである。「木人戯的紹介」その他についてはすでに述べた。ここでは表題にもなっている「傻子的治療」について触れ、小論の締めくくりとしたい。

「傻子的治療」は、はじめ〈大眾文芸〉第2巻第3期「新興文学専号・上冊」(前出)「木人戯」の欄に掲載された。そこでは、「陶晶孫作」のようになっており「翻訳」とは明記されていない。だが、蘆正言「陶晶孫著訳作品目録」では、これを「翻訳」とし「(独) 攀斯・左克斯原著」(ハンス・ザックス原著)としている⁽²⁷⁾。私は原本の現代書局版『傻子的治療』を見ていない。したがって、それがそこで「作」となっているのか、「訳」で「(独) 攀斯・左克斯原著」となっているのか確認できないけれども、間違いなくい言えることは、「作」でも「訳」「(独) 攀斯・左克斯原著」でもなくて、村山知義の「莫迦の療治」の翻訳、翻案だということである。

ハンス・ザックスの「馬鹿の療治」は、もともと築地小劇場第66回公演のために久保栄が翻訳し、27年7月22日から31日まで、ハンス・ザックス「謝肉祭狂言(二種)」として、「ひどい酒」(同じく久保栄訳)と共に築地の舞台にかけ

られ、翌28年4月世界戯曲全集刊行会が出した世界戯曲全集第12巻『独逸古典劇集』に収められた。村山知義の「莫迦の療治」は、冒頭に「ハンス・ザックスの同名の戯曲をもとにして」とあるように、久保栄訳「馬鹿の療治」を「軽装備の公演用に、また労働者の集会での労働者自身の手による上演用に、アレンジした」⁽²⁸⁾ものである。村山知義の「莫迦の療治」は、29年9月大阪、京都の東京左翼劇場の公演で上演され、29年11月号の〈劇場街〉に掲載された。

陶晶孫の「優子的治療」は、〈劇場街〉所載の「莫迦の療治」を底本にしたのであろう。提供者は〈劇場街〉に關与した山上正義だと思ふ。陶晶孫がそれに依ったことは、幕開きと同時に「医者」に付いて登場する「助手」の台詞をみただけで明らかであろう。村山の作品で、「申しご主人様、これは門口を間違えたようにござりまする。この処には、病人などの姿は見えませぬ。御覧の通り、あれに居ります人々は、爽かな、はればれしい顔を致いて、やまいのやの字も知らぬ体に見受けまする。いっそプロレタリア・バンド（又は音楽家同盟）にでも来て貰うて、（後略）」とあるのを、陶晶孫の「優子的治療」では、「呀、主人先生、似乎走錯門了。這兒不像會有病人。你看他們很高興又起勁。看看他們的高興，似乎這兒不是我們來的地方，要是請音樂家聯盟來到的地方」としている。村山は、久保栄訳をアジ・プロ劇にするため当時の日本の状況に置き換えた。当然のことながら、久保訳には「音楽家同盟」などという言葉は出てこない。「いっそお囃子にでも来てもらうて」となっている⁽²⁹⁾。陶晶孫は、それを「音楽家聯盟」としているわけで、陶晶孫が村山知義「莫迦の療治」に依ったことは明白である。陶晶孫は、その上でこれを中国風にした。たとえば、陶晶孫は村山がそこで日本向けにアレンジした、「無新」（無産者新聞）などは省略し、「隅田川」などの地名は「黃埔江」に置き換えている。以上のことから、陶晶孫「優子的治療」は、村山知義作「莫迦の療治」の翻訳、翻案というのが正確である。

注

- (1) 写真は〈新文学史料〉(92年)で最初に見たが、ここでのものは李偉江編『馮乃超研究資料』(陝西人民出版社 92年3月)所収に依る。
- (2) 史若平編『成仿吾研究資料』(湖南文芸出版社 88年3月)。成仿吾は8月10日が誕生日で、〈洪水〉第3巻第34期(27年9月16日)の編集後記、「小消息」にはこの日に合わせて彼の論集『使命』が出版されること、成仿吾が近く日本に行き、二ヶ月ほど滞在して帰国すると記されている。

- (3) 陳頌声等編『創造社資料・下』(福建人民出版社 85年1月)。
- (4) 馮乃超と社会科学研究会、日本のプロレタリア文学、〈文芸戦線〉などについては拙稿「東京左運結成前史・(その一)」(『左運研究』第1輯 89年3月)をご参照いただきたい。
- (5) 王道源と「青年芸術家連盟」ことなどについては、注(4)、及び拙稿「東京左運結成前史・(その一)・補一」(『左運研究』第2輯 92年5月)をご参照いただきたい。王道源については紙幅の関係から小論で触れることができなかった。いずれ稿を改めて論じてみたい。
- (6) 陶坊資「陶晶孫年譜」(張小紅『陶晶孫百歳誕辰紀念集』百家出版社 98年12月所収)。澤地久枝『続 昭和史のおんな』(文芸春秋社『文春文庫』 86年8月)などに依る。
- (7) 尾崎秀樹『ゾルゲ事件』(中央公論社『中公文庫』 83年12月)。丸山昇『ある中国特派員』(田畑書店 97年6月)。丸山昇『ある中国特派員』には、帰国後の陶晶孫と尾崎秀実、山上正義の往来が具体的に記されている。
- (8) 太田進「帰国後の陶晶孫」(中国文芸研究会〈野草〉第28号 81年9月)。
- (9) 丁景唐編選『陶晶孫選集』(人民文学出版社 95年5月)、張小紅『陶晶孫百歳誕辰紀念集』(前出)など。日本では伊藤虎丸が陶晶孫『日本への遺書』(東方書店 95年7月)を出版、解説を加えている。
- (10) 陶晶孫と尾崎秀実とを繋いだのが弟陶烈ではないかということは、早くから議論されていた。ここでの論証は、そうした太田進、伊藤虎丸等の予測を改めて実証したにすぎない。
- (11) 〈学芸〉第11巻第4号「追悼社友陶烈氏專号」(31年4月15日)。陶晶孫はここに「亡弟陶烈の略伝」など、陶烈に対する思いを抑えた口調で綴っている。
- (12) 柘植秀臣「亡き父を憶う」(『わが内なる中国』並記書房 71年10月)。
- (13) 柘植秀臣「尾崎秀実について」(『わが内なる中国』前出)。
- (14) 柘植秀臣「『心とは何か』を求めて」(『わが内なる中国』前出)。
- (15) 柘植秀臣「陶さん兄弟のことども」(『わが内なる中国』前出)。
- (16) 注(13)に同じ。
- (17) 注(15)に同じ。
- (18) たとえば、柘植は「仙台における魯迅の追想」(『わが内なる中国』前出)の中で、陶晶孫を知ったのは、陶晶孫がまだ「仙台に居を構えていた」時だという。
- (19) 注(15)に同じ。
- (20) 丁言昭「陶晶孫与中国現代木偶戲」(張小紅『陶晶孫百歳誕辰紀念集』前出 所収)。丁言昭には『中国木偶史』(学林出版社 91年8月)もある。
- (21) 村山知義と東京左運の関係については、拙稿「東京左運の成立、及び成立期の東京左運について」(『左運研究』第3輯 93年3月)を参照していただきたい。
- (22) 村山知義「解説」『スカートをはいたネロ』(『村山知義戯曲集・上巻』新日本出版

社 71年3月 所収)。

- (23) 佐々木孝丸『風雪新劇志』(現代社 59年1月)。
- (24) 「木人戯社第一次公演預告」(〈大衆文芸〉第2巻第1期 29年11月1日)。
- (25) 村山知義「解説」「やっぱり奴隷だ」(『村山知義戯曲集・上巻』前出 所収)。
- (26) 陶晶孫「木人戯的紹介」(〈大衆文芸〉第2巻第3期 30年3月1日)。
- (27) 蘆正言「陶晶孫著訳作品目録」(張小紅『陶晶孫百歳誕辰紀念集』前出 所収)。
- (28) 村山知義「解説」「莫迦の療治」(『村山知義戯曲集・上巻』前出 所収)。なお、本文に引用した村山知義「莫迦の療治」の原文も『村山知義戯曲集・上巻』所収の「莫迦の療治」に依った。
- (29) 久保栄訳、ハンス・ザックス作「馬鹿の療治」(一幕)(『久保栄全集・第10巻』三一書房 62年10月 所収)。

(埼玉大学)